地域は大学に何を求めているか　大学は地域に何ができるか

ともに語り、ともに考える

聞き手/構成/編集
西村 美東士（にしむら みとし）
徳島大学大学開放実践センター教授

本学の地域貢献活動は大学評価機構から
高く評価されました。
また、大学開放実践センターが昭和61年という比較的早い時期に
開かれるなど、地域に対する教育・研究活動による貢献は、
歴史と先進性をもって進められてきました。
最近では、徳島地域連携協議会も始まりました。
今年、常三島キャンパスの工学部と総合科学部との間の通りの様子が
がらりと変わりました。高い壁や柵をなくした「敷居の低い」
コミュニティモール（遊歩道）をめざして工事が進められているのです。
ですからこの通りは、一般市民からも親しまれる徳島大学の
新しい方向を示す象徴と考えられます。しかし、それでは
その方向の中味とはどんなものであるべきなのでしょうか。

Mitoshi Nishimura

山本 淹子（やまもとひさこ）
昭和33年 学芸学部 卒業
ボランティア

はじめに

Mitoshi Nishimura

過去の大学は、それを取り巻く地域の人々に支えられていたように思われます。たとえば学生街は学生たちを温かく見守ってくれていました。とくに徳島大学については、徳島の人たちは今でも「わが町の徳大」という意識をもって接してくれていると感じられます。半面、時代の流れとともに徳大特有のそういう地域での存在感もだんだんと薄れてきているようにも思われます。

もちろん、そのような過去の存在感をそのまま復活させようとしても無意味なだけでしょう。本特集では、それよりも、コミュニティモールなどの象徴が示す新たな方向性の中味を見いだそうとしました。そこで、市民も一方的なサービス享受者としてではなく、逆に徳島大学にも貢献していただくような双方向の協働のあり方を探ろうとしたのです。

対談× 山本 淹子

Hisako Yamamoto

男女共生を学ぶ場としての大学に

学生時代からユネスコの活動などに参加していた山本さんは、県庁に入り農業生活指導員などの職務を経、県青少年センターの所長を最後に退職。現在は『男女共生ネットTokushima』や『青少年育成アドバイザーの会』など数々のボランティア活動でいそがしい日々をおくっています。

「21世紀は人権や生涯学習の社会ですから、基本的には男女共同参画の社会の実現が一番重要な課題になるのではないでしょうか」

と語る山本さんからは、まず学生への思いが出ました。

「学生の皆さんにももっともっと男女共同参画社会とはどんなものなのかということをご理解いただきたい。卒業してどんな職業に就かれても、男女が共にお互いの個性を尊重できるように、基本的な意識として持ってほしいです」

また先輩の立場から若い女性には、

「やさしく、きびしく自分を律しながら責任ある仕事のできる女性として自立してほしいです」

とのアドバイスが。

Hisako Yamamoto

今日まで公開講座などのサービスは大いに充実してきましたが、その次の発展の段階として「地域に支えられる大学」のための新しいあり方が必要だと考えたのです。

「大学は地域に何ができるか」の答は、「大学は地域と何ができるか」さらには「地域は大学に何ができるか」を考えるなかで見つかるのではないでしょうか。そのため、様々な分野で地域において活躍する徳大の先輩方に聞きました。

大学への希望としては、

「お休みには大学が実施する公開講座によく出席していますが、女性が政治や政策を学べるような講座、女性を育成できるような講座、じっくりと語り学びあえる塾のようなものを、ともに模索しながら実現できたら素晴らしいですね」

と、大学を勉強だけでなく社会を学ぶ場として提案してくださいました。

山本さんは最近、本校の公開講座『自分史講座』を受講しました。県庁で農村生活改良普及委員や消費者行政の指導などを通じて、自分のライフプランをきちんと立てることの大切さを感じていました。しかし、

「私たちの学部がなくなって、困ったことがあればいつも相談にのってくださった先生方もいなくなって、私にとっては徳大が少し遠くなってしまったような気持ちです」

そんな山本さんが、もう一度徳大キャンパスに帰ってきて『自分史講座』を受講したのです。

『男女共生ネット』の中にも本校出身の先輩はたくさんいるそうです。山本さんはそんな仲間たちとともに、徳大がさらに市民や地域に開かれた学びの場として開放できればという思いももたれています。ここに今回の特集のテーマに対する答えのヒントがあるように思います。

対談× 佐藤義忠

Yoshitada Sato

歴史を知ることが文化を育てる

教員を退職後、中央公民館を経て現在東富田公民館で館長を務める佐藤さんは、

「徳島の人は自分が住んでいる地域を知るために、歴史をもっと知ってほしいですね。町おこしや文化おこしもそこから始まります。人づくりや環境づくり、全て心の問題ですね」

と、富田町がいかに歴史的に重要な町であるかとうとうと語ってくれました。歴史的な人物にまつわるエピソード、武家屋敷として保存されている原田家や徳島城から託された桜の木などなど、さらに話は徳島県の歴史にまでおよびました。

また自ら歴史マップを制作して、ボランティアの人たちとともに公園や学校の前に建てたり、歴史探訪の案内役をしたりします。その他にも『武家屋敷の蜂須賀桜を守り広める会』や『ふるさとを描き残す会』等に参加したり、地域で子供を育てる体験学習など多くの活動に参画しています。これら地域ぐるみでの多彩な町おこしは『レインボー東富田プラン』と名付けられ、これらの活動に対して文部大臣表彰も受けているほどです。

地域は大学に何を求めているか　大学は地域に何ができるか
ともに語り、ともに考える

佐藤義忠（さとうよしただ）
昭和33年 学芸学部 卒業
東富田公民館館長

Yoshitada Sato

学生時代には歴史教室で当時代々受け継がれてきた世話役をし、それはそのまま同窓会のような形で『史学会』として今でも続いています。毎年8月15日の終戦記念日には当時の仲間が集い研究会を開催。先生を招いて研究成果の発表や講義をしてもらっているのです。

「以前、徳大の先生に町づくりのためのお話ししていただいて、大変ためになりました。それから地域の皆さんの意識が変わってきましたよ。西村先生にも家庭教育学級で子育ての学習のために2年間来ていただきましたね」

と、地域と大学とのさらなる幅の広い交流が大切であると語ってくれました。

また大学とともに町おこし文化おこしをするためにもう一歩踏み込んで、

「今の学生にも自分たちの住む地域の歴史をもっと学んでほしい。視野を広げてほしい。そのためにどんどん町の中に出てきてほしいです。いっしょに歴史を勉強しましょう」

また東富田には、鳴門の板東俘虜収容で、日本で最初に『第9』を演奏したオーケストラの指揮者エンゲルさんも2年半住んでいました。そのために彼の名を冠した地元の市民のコーラス団があります。

「このコーラス団と徳大オーケストラ部との合同演奏も実現したらすばらしいでしょうね」

と、学生たちとの交流も提案していただきました。

対談×
川田春夫
Haruo Kawada

自ら動けば徳島も楽しいことがいっぱい

川田さんは鹿児島県の出身です。在学時からイベント企画サークルを立ち上げたり、徳島市社会教育課が主催する『ヤングフェスティバル』の運営委員会に所属したりして活動していました。卒業してからも市社会教育委員として活躍、青年層の活性化や人材育成に携わってきました。

在学時には学費を稼ぐために市からの委託で汚水処理場の水質検査の仕事をしていました。その経験を生かして水質保証会社に入社。2年前には学生時代にボランティアで開局イベントを行った『FMびざん』に縁あって転職し、現在は企画部主任として企画から技術、番組表の編成、営業まで幅広い才能を発揮しています。またメディア関係の仕事はいろいろな人と出会う機会も多く、現在も市生涯学習運動の青年ボランティアゼミ事業、生涯学習施設ボランティア、音楽の町づくりなど多彩な活動を展開しています。

Haruo Kawada

川田春夫（かわだ はるお）
昭和59年 工業短期大学部 卒業
株式会社エフエムびざん勤務

「ボランティアというより、お祭りが好きなんですね。徳島の人はよく、徳島には面白いことがないとか、何もない、行くところがないなどと言いますが、そんなことはありません。私は実は人付き合いが苦手なんです。でも人と出会わなければ前に進まないと思っています。ですから誰でも自分から動いて何かを始めたら、楽しいことはいっぱいあるし、徳島にはその要素はたくさんあるんですよ」

というように、ずっと徳島で住んでいるとつい見落としてしまいそうな、私たちの気づかない徳島の良さを見つけることの大切さを指摘してくれました。

また佐藤さんと同じように、

「歴史を知らなければ町づくりも物づくりも進まない。私は西洋史が好きなんですけど、郷土の歴史は好きというより知らなければならない」

と、歴史的な視野、視点を養うことの大切さを、自らの経験から語ってくれました。

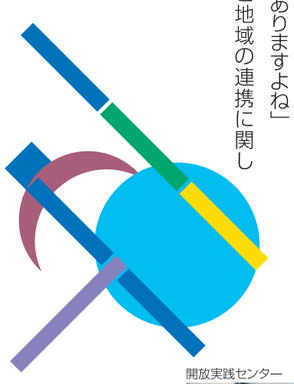
現在の大学に対しては厳しい言葉も。

「今の若い人は元気がないように見えます。大学が就職のためにあるような、まるで塾のようになっていませんか。学生が社会に出てしっかり自立できるように品質保証して卒業させてほしいですね。それができない学生は卒業させなければよい。卒業が人生の終わりではなく、そこからがスタートですから、その方が学生のためでもありますよね」

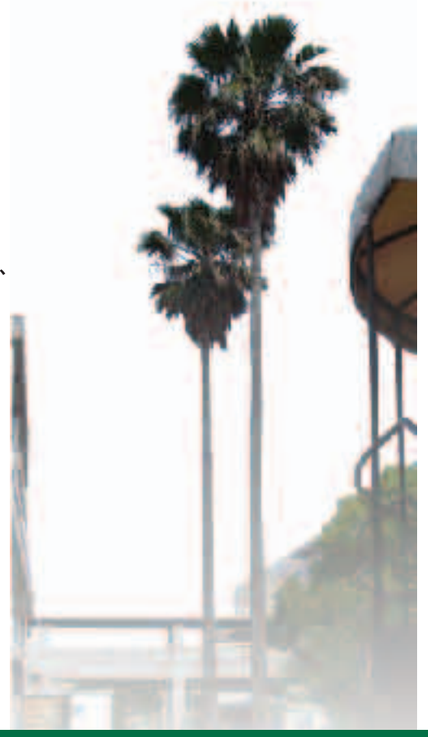
その上で大学と地域の連携に関しては、

「今でも何かわからないことや聞きたいことがあれば大学の先生を訪ねていきます。大学はもっともっとオープンになるべきだと思います。もっと気安く使えるように開放してくれたらうれしいですね。やはりまだまだ敷居が高いような気がします。それとただハード（施設）を作っての地域貢献ではなく、先生方の持っているソフト（専門知識）をもっと生かせるようなものがほしいです。そのために先生方にもっと外に出てほしいですね、市民の一人として。地域をもっと知ってほしい。地域貢献や連携というのはけっして難しいことではなく、人と人との交流があれば新しいもの、本当に必要とされているものがどんどん生まれてくるのではないでしょうか」

このようにハード面ソフト面両方合わせて地域に貢献できる大学と、地域の人がもっと気さくに利用しやすい大学であってほしいとの提案が出ました。



開放実践センター



三人の話を聞いて、それぞれの方がそれぞれの持ち場で
個性的に活動していて、それとうまく連携できれば徳島大学の
事業や経営に十分生かせると意を強くすることができました。
しかし、そのためには、コミュニティモールという
象徴だけでなく、内実としてもオープンマインド（開かれた心）が
本学全体の経営や教職員一人一人に求められるといえます。
もちろん、そこで要求されるオープンさは義務的なつらいものではなく、
地域活動の楽しさを大学に引き込む楽しいものなのでしょう。
そんな感覚ももつことができました。
つぎに、学生をきちんと教育することが地域の立場からも
求められていることがわかりました。
男女共生教育、郷土史教育、そして社会に対して品質保証できる教育が
求められました。また、大学教師自身も、地域の歴史と現状を
知ったうえでこそ、よりよい研究ができるのではという指摘も
いただきました。
大学が、地域の人々と常日頃、交流し、相互関与を積極的に
進めることによってこそ、大学の教育・研究活動自体も一段と
深まるといえるのでしょう。